

Check

今月の栽培ポイント

10月

営農情報



詳しくはお近くの下記事業所までお問い合わせください。

東尾道営農センター ☎0848-56-1231
 尾道北営農センター ☎0848-29-9611
 向島営農センター ☎0848-44-2106
 因島営農センター ☎0845-25-6161
 世羅営農センター ☎0847-25-5029

浦崎支店 ☎0848-73-3311
 御調支店 ☎0848-76-2242
 甲山支店 ☎0847-25-5035
 世羅西支店 ☎0847-37-7100

水稲

ほとんどの圃場で刈取りが終わり、収量や品質の結果でこの一年の栽培を振り返る時期となりました。

収穫した玄米などを再度見直し、原因と対策の分析を行うことが、次年度の米づくりの第一歩となります。

【圃場の細かな点検・修繕を】

本年度の栽培を振り返り、圃場の点検や修繕に取り組めるのもこの農閑期です。

この秋から来年の春までに圃場の欠陥を点検修繕しておきましょう。

圃場の均平化に努めたり、漏水の激しい圃場では畦際に資材を投入するなど、細かな点検や修繕をこの時期に必ずやっておきましょう。漏水を少なくし、水を均一に張ることができ、除草剤の効果を十分に発揮させることができます。

また、圃場の均平化は除草剤だけでなく、粒剤や「豆つぶ」などの本田防除剤を効率的に効かせることが可能になります。

【米づくりはこの秋から】

◆「秋起し」の推奨

刈取りが終わったら、できるだけ早いうちに耕運するようにしましょう。地温が高いうちにワラを鋤き込んでしまえば、土の中に残っている肥料の影響等もあつてワラの分解がスムーズに進みます。また、ワラの分解を考えると耕運は最初から深く耕すのではなく、1回目よりは2回目というように徐々に深く耕すようにしましょう。

また、石灰窒素などのワラの分解を促進する資材を積極的に投入することで、分解がより一層促進されます。

◆次のような症状が圃場で発生していませんか？

- ・浮きワラが多い
- ・ジャンボ剤やフロアブル剤などの省力型の除草剤が効きにくい
- ・田んぼに入るとボコボコガスが発生していた

ワラの分解が進まなければこのような症状が発生し、米づくりに悪影響を及ぼすため、特に「秋起し」を推奨します。

◆地力の回復

刈取り後の稲わらや稲株には「ケイ酸」や「加里」が多く含まれており、その成分を土中に返してやることで、翌年産の成分として再利用できます。

稲わらに含まれるケイ酸の量は約11%もあり、重量から換算すると、年間必要量の約80%を賄うことが可能です。天然資源を有効に活用しましょう。

秋起しをして有機物の腐熟を促進しましょう。



【土づくり資材を活用しましょう】

この時期に行う「土づくり」は、来年の米づくりに向けて、とても重要な作業です。土壌診断を行い「ケイ酸」や「加里」が不足していれば「ケイ酸加里」を施用しま

しょう。

また、マグネシウム、カルシウム、鉄等の微量要素を補給し、地力を向上させることによって

- ・天候不順に影響されにくい生育
- ・病害虫に対して抵抗性が高い生育
- ・安定した収量や高い品質

が期待できます。土づくり資材を積極的に活用して来年の「米づくり」の基盤作りに取り組みましょう。

資材の選択や投入量は稲作暦を参考にするか、お近くの営農センターまたは支店の担当者にご相談ください。

土づくり資材を活用した土づくりに取組んでみましょう。

柑橘

本年度は気温が高いため着色遅れや浮皮の発生が心配されます。適期収穫を心掛けましょう。

【中晩柑類・みかんの樹上選果(摘果)】

収益につながる等階級に仕上げるため、樹上選果を徹底しましょう。規格外果実を摘果しておくと、収穫・家庭選別が大変楽になります。本年度は日焼け果が多いので徹底排除してください。

【収穫出荷について】

◆収穫から出荷までの注意事項

収穫前には腐敗防止剤を散布する。

(※レモンは散布しない)

・出荷前に必ず防除履歴書を提出する。

・味を揃え浮皮などによる商品ロス防止のために分割採取(外生り果と内生り果の収穫時期を変えること)を行う。

・良く切れるハサミを使用し、二度切りを徹底する。(手が痛い人はドクターカットがおすすめです)

・果実は丁寧に扱う。(特にレモンは衝撃によりヤケ果が出やすいので注意する)

・選別する場所は明るくして行う。

(蛍光灯は、太陽光に近い演色AAA昼白色、LEDは商品名テクテラスがおすすめです)

・生傷・日焼け・アザミウマ被害果は家庭選別で排除する。

【品質向上対策】

◆みかんの浮皮防止

雨が多く浮皮の発生が懸念される場合は、蛍光期にフィガロン乳剤を散布します。(樹勢が弱るので年間2回までの使用にしてください)

◆枝吊り

枝吊りを実施し着色向上を図りましょう。

◆灌水

しらぬひ・はるみは、果皮障害防止のため11月下旬頃まで、降雨の無い場合は灌水を実施しましょう。

【病害虫防除】

◆アザミウマ

昨年度はみかんで甚大な被害が発生しました。着色期のアザミウマ被害は、果実の腐敗につながります。発生が見られる場合は、コテツフロアブルで防除してください。



▲アザミウマ被害

◆ハダニ

着色期のハダニ被害は着色不良に繋が



ハダニ被害果

健全果

り、著しく正品率が低下します。大発生する前に薬剤を散布しましょう。

◆みかんの腐敗防止剤散布

収穫前には必ず腐敗防止剤を散布しましょう。

◆炭そ病(流れヤケ)

秋の気温が高い場合は、10月下旬にも防除が必要です。八朔や安政柑を対象に、防除暦に従い薬剤を散布しましょう。

◆八朔の落果防止

11月上旬に落果防止目的でマデックEWを散布しましょう。紅八朔は着色が遅れるので、ヘタ落ち防止目的で11月下旬から12月頃に散布しましょう。

◆収穫後の尿素散布

樹勢回復を図るため、温州みかんは収穫後尿素を葉面散布しましょう。隔年結果防止効果もあります。

◆しらぬひ・はるみ水腐れ症防止果皮障害防止

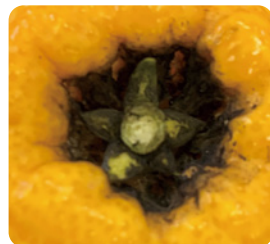
夏に干ばつを受け、12月に雨が多いとしらぬひではヘタ周辺が黒くなったり、ひび割れが発生し、はるみも果皮障害が発生します。過去多発した園地では、ジ



▲しらぬひ こはん症



▲はるみ果皮障害



▲しらぬひのヘタ黒果、ワックス層が剥がれ、汚れが付着し黒く変色している。進行すると穴が開いたり、腐敗する。

ベレリン1PPMを散布すると発生時期を遅らせることができます。

はるみは6分着色、しらぬひは8分着色頃に、葉から滴り落ちない程度樹冠外周の果実中心に散布します。

【夏秋梢の処理】

鉛筆より太い枝は芽つぼの上で処理し、弱い枝は芽つぼの下で処理します。樹勢の強い樹は除葉処理もセットで行いましょう。

直立し樹形を乱す枝は基部から切除します。

しらぬひ・はるみは次年度の結果母枝として夏芽を利用するので切らないでください。

レモンはかじよう病防止のため、夏秋梢は徹底除去しましょう。

徒長枝も簡単に切れる、にしがきロング剪定鋏を使用すると能率があがります。

【秋肥の施用】

本年度の樹勢回復と次年度の養分蓄積目的で施用します。時期が遅くなると吸収が悪くなりますので10月下旬から11月上旬までに施用しましょう。

【鳥獣害対策】

◆ヒヨドリ

「小太郎」を利用し、樹に直接ミシン糸をかけることにより被害を防止できます。



▲小太郎

◆カラス

釣り糸を1m間隔でカラスが飛んでく方向を中心に、高さや位置を変え設置します。透明もしくは黒が効果的です。

◆イノシシ

イノシシ対策で重要となるのは、餌付けをしないことです。摘果果実や柵の外に飛び出た果実も餌付けをしていること

になります。侵入防止対策の前に園地周辺の整備を行いましょう。

フェンスや電気柵は、樹から1m以上はなして設置し、周辺のイノシシの隠れ家になりそうな雑草・雑木を伐採しましょう。

フェンスは縦線が外側になるように設置します。電気柵はイノシシの鼻に電線が当たらないと効果を発揮しません。電線が地上から20cmと40cmになるように配置します。雑草による漏電に注意しましょう。電気柵は昼間でも通電し、柵の入口も閉じておきましょう。

アスファルトの上にイノシシの足があると通電が悪く効果が落ちるので、道路から少し園地よりに設置しましょう。

落葉果樹

【共通管理】

収穫も終わり一段落したところではありませんが、樹は秋根を伸ばし貯蔵養分を蓄え、来年の生産の準備を始めています。

【早期落葉防止と防除】

収穫後も定期的(10日に1回程度)に灌水し落葉の軽減をはかりましょう。

また、健全な葉を保ち、貯蔵用分を蓄えて来年の初期生育をよくするために、病害虫防除を徹底しましょう。特に病気

や、害虫が目立って発生した園では丁寧な防除を行ってください。

落ち葉や落果は、病害虫の越冬源になり、翌年の発生源となります。園外に持ち出しましょう。

【土づくり】

根が十分に活動できる土壌環境が必要です。

有機物の施用や深耕を積極的に行い、土壌の透水性や通気性を向上させましょう。

有機物は、必ず完熟した物を施用してください。未熟な物は、根腐れやチッ素飢餓などによる樹勢衰弱を引き起こしやすいので注意してください。土づくりは農業の基本中の基本で、絶対に欠かすことのできない重要な作業です。長期的な計画を立て、確実に行いましょう。

ぶどう

【元肥の施用】

施用後は十分に灌水を行ってください。

【園内環境整備】

落ち葉や落果は、病害虫の越冬源になり、翌年の発生源となります。園外に持ち出しましょう。

【改植】

着色不良樹や高樹齢樹は、生産性も悪く出荷量減に繋がりますので、早期に改植しましょう。

いちじく

収穫作業も終わり、今月から樹は落葉を始め休眠期に入ります。

【土づくり】

イチジクは通気性に優れ、水はけの良い土壌を好みますが、長かった収穫作業により地面はかなり踏み固められ、肥料や灌水が効きにくい状態になっています。

中耕の実施、客土の実施など、土壌改良を行ないましょう。

【園内の清掃】

落ち葉や落果は、病害虫の越冬源になり、翌年の発生源となります。園外に持ち出しましょう。

もも

元肥は施肥基準を参考に11月上旬に施用しましょう。12月以降にずれ込むと、肥料養分の分解が遅れ、初期生育に影響するので遅れないようにしましょう。

施用後は、中耕・灌水を行って肥料の分解促進、肥効向上を図ります。

落ち葉や落果は、病害虫の越冬源になり、翌年の発生源となります。園外に持ち出しましょう。

なし

【元肥の施用】

10月中には施用し、施用後は十分に灌

水を行なってください。

【園地管理】

晴天が続く土壌が乾燥するようであれば、定期的に十分な灌水を行なってください。

かき

【収穫】

雨天や朝露などで果実の表面が濡れている時は、果粉が落ちたり、果実の表面が黒くなったりすることがあります。果皮が乾いてから午前中に収穫しましょう。つるし以外の柿は、果梗を短く切り、果実に傷を付けないよう注意して下さい。

【脱渋処理】

脱渋に向く果実は、ヘタが健全で、果実も病虫害や傷などが無いものを使用します。また、小さい果実は、渋が残りますので除きます。過熟な果実も脱渋により軟化しやすいので、果皮色が同じ程度の果実を揃えます。

◆アルコール法

アルコール度数が30〜35度の焼酎をヘタにつけ、ヘタどうしを合わせて新聞紙でくるみ、厚手のビニール袋に入れます。袋の中の空気を掃除機などで出来るだけ減らして密封します。

20℃の条件下では5日程度で渋が抜けます。

◆ドライアイス法

カキ10kgにドライアイス250〜300gが目安です。厚手のビニール袋の底に四つ折りにした新聞紙1枚を入れ、柿を入れます。

柿の上に新聞紙などを置き、ドライアイスをのせます。

袋の中の空気を掃除機などで出来るだけ減らして密封します。

20℃の条件下では4日程度で渋が抜けます。

家庭菜園

秋も深まり過ごしやすい気候になり、畑での仕事もやりやすくなってきます。日暮れが早いので明るいうちに作業しましょう。

【葉物野菜の栽培】

ホウレンソウ、小松菜、春菊などの小型の葉物野菜や、二十日大根などは、まだ種まきが可能です。害虫も減っており比較的作りやすい時期なので、畑に空いた場所があるのなら挑戦してみてください。

葉物野菜は株ごと引き抜くのではなく、外葉を千切るように収穫すれば、長期間の収穫が可能です。

【タマネギの栽培】

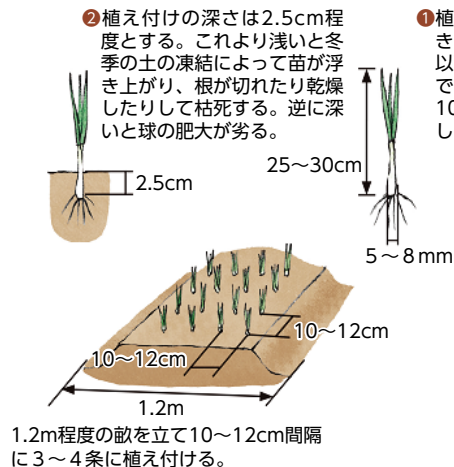
10月中旬から11月中旬にかけて、早生

のものから順番に苗を定植していきます。

◆畑の準備

植え付け2週間前に、10㎡当たり熟成堆肥20〜30kg、石灰1・5kg、植付け1週間前に元肥1・5kgを基準に施用して耕起させます。畦は2条植えで約80cm幅、4条植えで約120cmに仕立てます。

① 植え付け適期の苗の大きさは直径5〜8mm以下、草丈25〜30cmである。株元の直径が10mm以上の苗は抽苔しやすい。



② 植え付けの深さは2.5cm程度とする。これより浅いと冬季の土の凍結によって苗が浮き上がり、根が切れたり乾燥したりして枯死する。逆に深いと球の肥大が劣る。

1.2m程度の畝を立て10〜12cm間隔に3〜4条に植え付ける。

秋まき栽培における植え付け苗の大きさは早生品種で、太さ6〜8mm、1本重6g程度。中・晩生品種で太さ5〜7mm、1本重5g程度が適当です。

概ね割箸くらいのもので大きさを基準にしてください。これより大きい苗を秋に植えるとトウ立ち株が多くなります。逆に苗

が小さ過ぎると収量が落ちてしまいます。

収穫期の畑を見渡して、全体の1割程度トウが立っているような状況が、収量的にはベストです。

◆管理

植え付け後、防寒と乾燥防止を兼ねて、もみ殻を条間や株間にまきます。マルチ栽培も有効です。土があまりに乾燥している場合は、暖かい日の午前中にたっぷりと灌水します。追肥については定植後1カ月経ったころに、10㎡当たり500g施します。以降の追肥は年明けの2月以降になります。

【べと病】

11月になるとべと病の感染好適条件が続く、特にタマネギでの発生が毎年多く見られています。

Zボルドーやバトファイターなど、登録農薬での防除を実施しましょう。

◆べと病防除のポイント

① 感染した株や残渣は見つけ次第、袋などに入れて圃場外へ

② 土壌消毒の実施（植付前）

③ 生育適温15℃前後の農薬散布

④ 降雨が続く前に特効薬を散布

※バトファイターなど